

FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！ 大学生活

Vol. 57

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

国文学について

国文学専攻では、古典文学から近現代文学まで幅広い文学作品を読み理解を深め、日本語がどのように変化してきたかについて学んでいます。さまざまな作品と出会い、同じ作品でも読者によって受け取り方や考え方が違うことを授業で改めて実感し、自分の世界が広がっていく楽しさを味わっています。



継続は力なり

文学部人文社会科学科国文学専攻2年
私立中央大学附属横浜高等学校(神奈川県)出身

井田 悠理香

私は中央大学の附属高校出身のため、内部推薦でこの大学に入学しました。内部推薦では自分が行きたい学部を希望として提出するのですが、高校生の私は大学で何を学びたいのか、将来何になりたいのか、しっかりと想像できていませんでした。はじめは中央大学文学部の学びのポートプログラムを選ぼうかと思ったり、ぼんやりと先生になりたいなと思っていましたため教育学を専攻しようかと考えたりしていました。

そんな中で、国文学専攻にしようと思った大きな決め手は、書道部の顧問の先生の言葉でした。「せっかく大学で学ぶなら、自分の強みを身につけられるような学部にしなさい」と、先生は私の背中を押してくださいました。そこで自分が好きなことをより深掘りして知識を身につけたいと思いました。幼少期から読書が好きだったこと、あまり得意ではない勉強の中でも小学生の頃から国語は好きな教科だったこと、さらに書道が好きだったことなど、自分の「好き」とことん向き合った結

果、国文学専攻にしようと思いましたが、今後この好きだという気持ち忘れずに、学修を続けていきたいです。

書道の楽しさ

前に触れたように、私は高校3年間、書道部で活動していました。高校1年生の芸術の選択科目で書道を選択した際、先生が「部員が少なく、このままだと来年は部ではなく同好会になってしまうから助けて！井田さんとっても上手だから！」と声を掛けてくださったのが入部のきっかけです(笑)。

もともと吹奏楽部に所属していたため兼部への不安はありましたが、小学2年生から通っていた習字教室を中学校に上がったタイミングでやめてしまった経験もあったことから「せっかくの機会を逃して後悔したくない！書く楽しさをもう一度味わいたい！」と思い、チャレンジすることにしました。

部員が少なく心配していたのが嘘だったかのようにその後は先輩も

どんどん増え、とてもアットホームな雰囲気の中で活動できたので、書道部は私がリラックスできる大切な場所の一つになりました。アットホームな雰囲気の中でも、書道をするときはみんな真剣に取り組む、先輩たちのメキメキとした成長に刺激を受けながら、自分も負けじと頑張ることができました。そのおかげで、メリハリのある充実した活動ができたと思います。また、高校2年生からは、書道部で仮名を書くようになりました。漢字ではなく万葉仮



万葉仮名の作品



ブラスコアー部での活動

名で和歌を書くというものです。仮名を書ける高校の書道部が数少ない中、仮名で大きな作品に取り組みることができました。これが、国文学専攻に入りたいと思うきっかけの一つにもなりましたし、書道部に入ってからのような経験ができて良かったと心から思っています。書道は生涯続けられるものなので、工夫して書き続けていきたいです。

ブラスコアー部への入部

大学では、応援団ブラスコアー部に入部しました。中高一貫校で5年間吹奏楽部にも所属しており、中学1年生の時、父に買ってもらった楽器を大学でも何らかの形で活かしたいなど考えていました。書道ができるサークルに入ることも考えたのですが、書道は高校の部活の先生に引き続きご指導いただけることになり、大学では吹奏楽の方をやりたいたいと思いました。その中でもブラスコ

アー部で大学のさまざまな運動部を音で盛り上げて応援するというのは大学生の期間にしか経験できないことなのではないかと思ひ、入部を決めました。いざ入部してみると、想像以上にハード。中高では屋内で座って演奏していたので、はじめのうちには外で立つて長時間応援することになかなか対応できませんでした。暑い中の練習や応援で倒れてしまったこともあり、体力をつけなければ……と痛感しました。

大変ではあるものの、野球の応援ではリーグ期間中毎週のように続く試合を通して、部員と喜びや楽しさ、悔しさを共有する感動を味わいました。アメフトやサッカーの応援では間近で試合を見ることができずし、ほかにもたくさんの素敵な瞬間に立ち会うことができます。また、親身に話を聞いてくれる優しい先輩や、話すといつでも自然と笑顔になれる同期の友達、人懐っこくかわいい後

輩など、活動の中で新しく素敵な人たちと出会えたことは、私にとっかけがえのない財産です。3年生では部を引張っていく立場になるので、同期と協力してより素敵な部活にしていきたいです。

これからについて

中学、高校、大学といろいろな経

験が今の私を作ってくれているんだなど、ここまで書いてみて感じました。これからは周りへの感謝の気持ちをもって、さらに自分の視野や価値観を広げられるよう、学業も書道も部活動も実生活も楽しみながら頑張りたいなと思えました。このような寄稿の機会をいただき、ありがとうございました。



文学部だより

文学部で学び、育む未来

つきむら はやと
月村 隼人 文学部事務室

皆さま、初めまして。この度、2024年7月より文学部事務室に着任いたしました月村と申します。2013年に中央大学へ入職して以来、経済学部事務室で9年間、学部独自の奨学金や入試広報、高大連携業務など、学生支援に関わる業務に従事しておりました。その後、管財部管財課にて契約発注業務を2年間担当し、大学運営の裏方としての役割も経験いたしました。

そして現在、文学部の授業に関わる業務を担当しており、大学教育の現場に携われることに大きな価値を感じるとともに、文学部ならではの魅力ある授業や意欲的な学生たちと触れ合う度、改めてこの大学職員という仕事のやりがいを実感しています。

中央大学文学部の魅力は「多様な学び」と「深い探求」にあると思います。文学、歴史、思想、言語など幅広い分野がそろっており、文学部生がそれぞれの興味や関心に合わせて学びを深めることができます。また、専攻分野に加えてほかの分野にも触れることで、視野が広がりが新しい発見につながることも多いのではないのでしょうか。こうした学びの積み重ねが、未来を考える力や豊かな思考力につながると感じています。

最後に、学生の皆さんにはぜひ、この学生生活を充実したものにしていただきたいと思っています。学問はもちろん、部活動やサークル活動などの課外活動や友人との交流、インターンシップや留学など、さまざまな経験を通じて視野を広げてほしいです。その一つ一つが、皆さんの成長や将来の力になると感じています。

職員として文学部の魅力を最大限に引き出し、学生の皆さんの学びが豊かなものとなるよう尽力してまいります。どうぞよろしくお願ひいたします。



きらめくライトアップが映える多摩キャンパス